



からしだね

2019年4月号
(548号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



本号の記事の主題など

ノノイ・プラザ神父による巻頭言

「復活祭おめでとうございます」

ウオード神父様とともに、感謝の祭儀を捧げます

池田教会のみなさま 御受難会の稲葉です

大人の日曜学校だより 2月24日

みんなの談話室

ウオード神父様の思い出

伝道者だったウオード神父様

ウオード神父著「十字架の使徒」を読んで

俳句

短歌

年間カレンダーに追加された行事予定など

巻頭言

復活祭おめでとうございます

ノイ・プラザ神父

四旬節がおわりました。40日の悔い改めの季節から、輝かしい復活祭の季節がやってきました。ついこのあいだ、わたしたちはイエスの受難と死を思いおこしました。主が耐え忍んだ恐ろしい苦しみに思いをはせた。十字架を受け入れたイエスは磔刑となりましたが、すべてはみなさんやわたしのためでした。言ってみれば、ほんの数日前、聖金曜日の典礼でわたしたちはイエスが過越を果たすのに付き従ったのです。けれど過越はイエスにすれば、いわば死から新たな命への脱出でしかないことを、わたしたちは知っています。

四旬節が始まりかけたころ、愛するガブリエル・ブレシュト神父とウオード・ビドル神父が帰天するのを、わたしたちは悲しい思いで目にしました。「脱出」はおふたりにもあったのです。特に異国の地でイエスへの信仰を分かちあうため、フランスとアメリカという生まれ故郷の国や共同体の快適な暮らしをあとにして旅立て、という呼びかけに応じた最初の一瞬がまさしくそうだった。それほど簡単なことではなかったが、最後までふたりはやり抜きました—自分たちに奉仕せよと神が命じられたのが、この日本であったことを信じて。ふたりは逝きました。ふたりもまたイエスとおなじく、永遠の命に向かうためには死を過ぎ越さねばならなかったのです。

これについては、聖パウロが慰めの言葉を私たちに語ってくれています。深い確信に満ちて言う—「キリストイエスにおいて洗礼を受けたわたしたちは、みなイエスの死において洗礼を受けたことを知らないのですか。じっさい死への洗礼によって、わたしたちはイエスとともに葬られた。それは御父の栄光によってキリストが死者のなかからよみがえったように、わたしたちもまた、新しい命を歩むためです。キリストの死によって

キリストとひとつになったとすれば、復活にもわたしたちはイエスとひとつにむすばれているのです。」
『ローマ人への手紙 6:3-6』

最後に、ネットで見かけたイエスの死と復活についての「あらすじ」を分かちあいましょう。簡単だが美しいですよ。子供向けだけれどかまわない、誰にだって自分のなかに「子供」がいますから。こんな調子です—「数日前にイエスが十字架にかかって死んだ。友だちも家族も、みんな悲しみにくっていた。イースターの最初の日曜日の朝はやく墓に詣でたひとたちがいた。墓が空なのを見たとき、みんなの驚きときたら！イエスの亡骸(なきがら)はどこ？誰かが盗んでいったと思ったマグダラのマリアは涙を流した。ふたりの天使がなぜ泣いているのか、と尋ねる。そのときマリアはイエスを見た。マリアは弟子たちのところに走ってゆき「わたしは主を見た！」と知らせる。」

きょうわたしたちはイエスキリストの復活を祝います。洞穴になった墓の入り口から巨大な石がなくなっていたのは、イエスを外に出すためではなかった。そんな必要などなかった—いまイエスは時間と空間を超えて動き回ることができるようになっていたから。墓石が取りさられたのはなぜかと言えば、死と呼ばれる神秘をわたしたちがじっくり考え、イエスの言葉と約束がほんとうだったことを最後には悟るようになるためなのです。

もういちど、みなさん御復活おめでとうございます！

Heading
Article

HAPPY EASTER

Nonoy Plaza C.P.

Lent is over. The forty-day penitential season now gives way to the glorious season of Easter. Few days earlier, we recalled the passion and death of Jesus. We meditated on the terrible sufferings he had gone through. He embraced the cross; allowing himself to be crucified - all for the sake of you and me. Yes, barely a few days ago, at our Good Friday liturgy, we accompanied Jesus, as it were, as he went through his Passover. But we knew that His was just a passing through, an exodus, so to speak, from death to new life.

As Lent was about to start, we sadly witnessed the passing away of our two beloved missionaries, Frs. Gabriel Brecheteau and Ward Biddle. They had their exodus, too, especially that very first moment when they responded to the call to leave the comforts of their community and country in order to share their faith to this foreign land. It must have been not that easy but they persevered to the end; believing that this is where God has called them to serve. Now they're gone. Now, they, too, like Jesus would have to pass through death on their way to life eternal.

In this regard, St Paul, the apostle, gives us some consoling words. Filled with deep conviction, he says: "Are you unaware that we who were baptized into Christ Jesus were baptized into his death? We were indeed buried with him through baptism into death, so that, just as Christ was raised from the dead by the glory of the Father, we too might live in newness of

life. For if we have grown into union with him through a death like his, we shall also be united with him in the resurrection."
(Rom 6:3-6 NAB)

To close, I would like to share this simple yet beautiful synopsis of the death and resurrection of Jesus that I came across in the net. It's actually intended for kids! But I guess it's okay because there is a child inside each of us. The story says: "Jesus had died on the cross a few days before. All of his friends and family members were very sad. Some of them came to the Tomb early on that first Easter Sunday morning. Imagine their surprise when they found the tomb empty!! Where was Jesus' body?! Mary Magdalene cries because she thinks someone has taken Him. Two angels ask her why she is crying. Then she sees Jesus! Jesus is alive! Mary Magdalene runs to tell the disciples the news; "I have seen the Lord!"

Today we celebrate the resurrection of Jesus Christ. Someone said quite well that at Easter, the huge stone at the cave's entrance was rolled away not to let Jesus get out of the cave. No, he didn't need it; for now he can move beyond space and time. The stone was rolled away so that we can take a look into the mystery called death and eventually come to realize that Christ's words and promises are indeed true!

ONCE AGAIN, HAPPY EASTER TO ALL!!!!

ワード神父さまとともに、感謝の祭儀を捧げます

ワード・ビドル神父様が2月13日(水)午後4時50分にご帰天になりました。95年のご生涯でした。

通夜は2月19日(火)19時からカトリック池田教会の聖堂で、来住英俊神父様の司式により執り行われました。アベイヤ補佐司教様をはじめ、近隣教会の司祭や修道士、修道女様がたが多数ご参列になり、アメリカからはご遺族の、ワード神父様の末の妹にあたるメリー・ヘイズさんや二人の甥御さん、姪御さんらも来られました。そしてワード神父様とさまざまな縁で結ばれた信徒たちで聖堂が満ちあふれました。

葬儀ミサは翌20日(水)の11時30分から山内十束準管区長の司式のもとにあげられ、ワード神父様を慕っていた大勢の人々が、天国へ旅立たれたワード神父様のために祈りました。韓国からアンドリュウ神父様、ミャンマーから畠神父様も駆けつけられました。ワード神父様の柩が教会から運び出される時、急にまばゆいほどの日光が差し込んで、会葬者を暖かく包みました。神よ、ワード神父様の志が次の世代に引き継がれていきますように。

通夜で述べられた**来住英俊神父様の言葉の要旨**

ワード神父様は、日本で60年間にわたって宣教に励まれました。宣教の使命をまっとうされたご生涯でした。私もワード神父様に指導を受けた者の一人です。ワード神父様と言えば、誰でも、満面の笑みを浮かべて両手を広げ、相手を受け入れてくださる仕草を思い起こします。そして「よくいらっしやいました」という歓迎の言葉を。それは生来のものだったのでしょうか？ いや、おそらくは、そうではなく、神の国を広めるために、キリストの姿を伝えるために、己を律し、自分の行動パターンまでも変えられたのだと思います。ワード神父様のあの振る舞いが感染したかのように、私も同様な行動をとるようになり、まことの意味で歓迎するということを学び取りました。

ワード神父様は自分が滑稽にみえることを恐れない人でした。これはと思う人にしつこくつきまとい、洗礼へと導き、御受難修道会へ入会させました。その行為で自分が人から浮いて見えることを自覚しておられました。それでもキリスト教の正論を語るのを恐れなかった。ワード神父様の行動にしろ、言葉にしろ、笑顔にしろ、日本人にはなかなか真似できないことです。しかし私たちはそれを受け継いでいかなければならない。そしてワード神父様が教えてくださったことを次の世代へ伝えていかなければならない。イエスが仰せになりました。「これを記念として行いなさい」

(文責・広報委員会)

葬儀ミサにおける**山内十束神父様の説教の要旨**

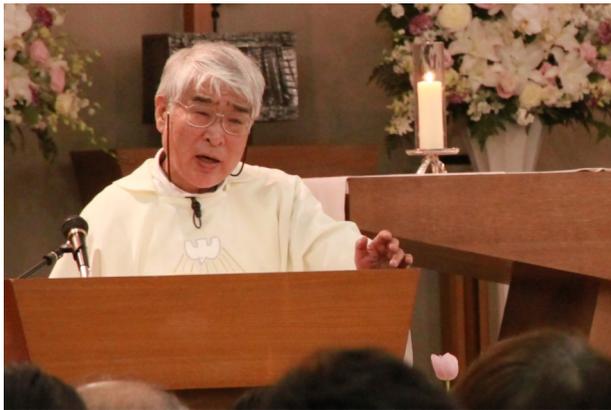
人は死んだらどうなるのでしょうか？ 黙想指導を始めた頃、復活について人々にどう伝えたいのでしょうか、死を迎える人にどう語りかけたいのでしょうか、とワード神父様に質問したことがあります。ワード神父様はその質問に直接答えることなく、「私は毎日の祈りを、ゲッセマネの園について黙想することから始めます」と言われました。(マルコ14章) イエス・キリストがどれほど悩み苦しまれたか、どれほど祈られたかを心に刻み込まなければ、復活はたんなる自分の心の平安のためでしかありません。裏切り者、罪びとを赦すとき、復活があかしされ、そのとき私たちは「生きる」のです。ワード神父様にとって復活とは、その人が「生きる」ことを表していました。ワード神父様と出会って、そのとき生き返らせてもらった人たちこそが、今ここに集まっている私達と言えるのではないでしょうか。距離を取って人と関わるのではなく、もう一步踏み込む、それこそが信仰なのです。肉に生きるなら死ぬが、霊に生きるなら生きる(ローマ人への手紙8章)。霊に生きる時、私たちは神の子となります。ワード神父様はそう思われていたのでしょうか。そしてご自分の死の時を前にして、ゲッセマネの園のイエスのように、「もうこれでいい、時が来た」とその時を受け入れられたのだと思います。時が満ちたワード神父様とともに、感謝の祭儀を捧げましょう。

(文責・広報委員会)



↑ 葬儀ミサを捧げる神父さま方

↓ 通夜でワード神父さまを偲ぶ来住神父



葬儀ミサを司式される
山内神父と中村神父



↑ 6年前のもみじ祭におけるワード・ビドル神父さま



葬儀ミサにおける中村克徳神父様の挨拶の要旨

ワード神父様は2月13日に主のもとへ穏やかに旅立たれました。神と出会い、神と歩み、日本での宣教に尽くされたご生涯でした。私もワード神父様に招かれて司祭となりました。暖かい、包容力のあるお人柄でした。ただ、せっかちなところもあって、パソコンの立ち上げにかかる、たった3分間が待てなくて、「もういいです」と席を立って行かれることもありました(笑)。皆様、今日はお集りくださり、ありがとうございました。

ワード神父さまの経歴

1923年3月18日 ミズーリ州カンザスシティで誕生
1943年 御受難修道会入会

1951年 司祭叙階

1957年9月 来日

1959年～1960年 長崎城山教会

1960年～ 宝塚、福岡、東京の御受難修道会で
黙想指導と司祭、神学生の指導および養成。
御受難修道会日本分管区管区長、
上智大学英語講師、日生中央教会主任司祭、
教誨師、
ME協力司祭を歴任。

2019年2月13日 帰天(95歳)

著書と論文

「十字架の使徒—御受難会の聖パウロ付・霊的日記」(あかし書房、1979年刊)

『夏目漱石における誠について』

(修士論文、米国コロンビア大学、1972)

大人の日曜学校だより

2月24日

「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしないで。」

(ルカ6・27 - 38)

“敵を愛し、憎む者に親切にしないで”。この週の箇所はイエスの教えの中でも、最もやさしく、最も厳しいみことばがたくさん出てきます。憎むべき相手にはどう対処すれば良いか。そんな時に思い出す、一篇の詩を今回はご紹介します。有名な詩なので、ご存じの方もいるかもしれません。人は様々な状況の中で「それでも前向きに生きなければいけない」そう教えられる詩です。

マザー・テレサの詩

人はしばしば、不条理で、非合理で、自己中心的です。

気にすることなく、その人を赦しなさい。

あなたが親切にしても、利己心と下心からそうしているとケチをつけられるでしょう。

気にすることなく、親切でありなさい。

あなたが成功しようとしている時、うわべだけの友人や、警戒すべき人間があなたに近づいてくるでしょう。

気にすることなく、成功させなさい。

あなたの正直さと誠実さによって、人はあなたを陥れようとするでしょう。

気にすることなく、正直で誠実でありなさい。

そして、あなたが何年もかけて創り上げたものを、他人は一夜にして壊してしまうかもしれません。

気にすることなく、創り続けなさい。

あなたが心安らかで幸福にいる時、恐らく人はそれを妬むでしょう。

気にすることなく、幸福でいなさい。

また、あなたが今日した良いことも、多くは忘れ去られるでしょう。

気にすることなく、良いことをしなさい。

最善を尽くしても、他人の満足からはほど遠いかもしれません。

気にすることなく、最善を尽くしなさい。

最後にはきっとわかるはず。それはあなたと神との間での出来事だったと、その人たちとのことではなかったのだと。

研修委員会

池田教会のみなさま

御受難会の稲葉です



みなさまのお祈りのおかげで、5年間の聖アントニオ神学院のすべての課程を終えることができました。また、2月23日(土)カトリック東京大司教区 秋津教会に於いて、タルチシオ菊地功大司教様 司式による助祭叙階のお恵みを、みなさまのお祈りのおかげで、受けることができました。重ねて感謝致します。

私は、2月上旬に東京から宝塚修道院へ異動してまいりました。異動してまもなく、ガブリエル神父様、ウオード神父様方の“死”を見つめることになりました。その直後に、助祭叙階式を私は迎えました。この非常に短い期間に起きた出来事は、私に次の示唆を与えてくれました。この2人の神父様方ともう既に帰天された御受難会の兄弟方の祈りとみなさまのお祈りがひとつになって、私を支えてくださっているのだ、という確信です。この祈りに支えられて、助祭の道を歩み始めることができました。

助祭として歩み始めたばかりの私、助祭の務めを果たしてゆくには、主イエス・キリストの導きと、皆様の支えとお祈りが大切です。必要です。どうぞ、今まで通りこれからもお祈りしてくださいませうに、お願い致します。

稲葉善章 CP

(写真はカトリック池田教会の年間第8主日のミサにおいて挨拶される稲葉善章助祭、2019年3月3日)

みんなの談話室 (五編)

ウオード神父様の思い出

S.M.

今から30年以上前、私はヤングウィークエンドというカトリックのプログラムに参加しました。あまり参加に乗り気ではなかったのですが、断りきれず、この泊りがけのプログラムが終わったら、またもとの生活に戻ればいいと、行くことに決めました。ところが、このプログラムが私の人生を大きく変えてしまったのです。このプログラムを指導して下さったのが、ウオード神父様でした。ウオード神父様によるゆるしの秘跡の間、私は聖霊の存在を強く感じました。今までの生活を悔い改め、神様に立ち返らなければ、と決心しました。その後も、ウオード神父様は迷える子羊である私のことをずっと心配して下さっていました。

アメリカ留学が終わり、私は婚約者のデイビットを連れて日本に戻って来ました。早速ウオード神父様に結婚することを伝えようと、電話をすると、神父様は喜んで下さるどころか、とても心配そうな声でこう言われました。「どんな人ですか？ すぐ連れて来なさい。」神父様の気迫に押されて、私達は二人ですぐに電車で飛び乗り、売布にやって来ました。その後、どんな話をしたのか、実は覚えていません。ただ、帰り際に、神父様が満面の笑みを浮かべて、こうおっしゃったのです。「あなたがこんな人を選ぶとは思っていませんでした！」やがて、私達は売布に新居を買い、黙想の家の近くに引っ越してきました。神父様は新居を祝福して下さい、また何度か遊びに来て下さいました。家の一室を告解所にして私達の告解を聞いて下さったりもしました。そして神父様の晩年、デイビットが、神父様を度々訪問するようになりました。同じアメリカ出身の二人は、自国の言葉で楽しく話をしたに違いありません。

先日ウオード神父様危篤の連絡を受け、デイビットと二人で会いに行きました。ちょうど昔神父様に呼ばれて二人で会いに行った時のように。二人で、神父様にお伝えしました。“Thank you, Father.” 私達を見守って下さり、ご指導下さり、本当にありがとうございました。神父様は、うなずいて下さったと思います。日本での宣教活動お疲れ様でした。私のように神父様によって人生が大きく変わった人は、他にもたくさんいらっしゃると思います。これからは、天国で私達の為にお祈り下さい。そう思うと、神父様とお別れしたのではなく、これからもずっと繋がっている気がするのです。

伝道者だったウオード神父様

H.T.

両手を広げて「よくいらつしゃいました」ウオード神父様が来客を迎える時のスタイル、お通夜のお説教で来住神父様も話されていて、私も思い出したことがありました。

ウオード神父様が小教区の司牧から退いて、売布修道院に戻られて始められた『御受難の研究』初日、神父様は前晩から持病のメニエール病のめまいと吐き気で、黙想の家宿泊棟の一階の部屋で寝込んでおられました。ベッドの下に新聞紙を入れた洗面器を置いて、今日の勉強会は中止にしようかと申し上げても、首を縦に振って下さいません。勉強会の開始30分前まで休んでいるから声を掛けに来てほしい。ご希望通りに声を掛けに行くと、起き上がって身支度を始められました。黒の修道服に革のベルト、そしてベルトの中央に十字架をはさむ、御受難会の神父様方の黙想者を迎える時のスタイル(昔はこうでしたが今は違うかもしれません)。『御受難の研究』の参加者が集まり始めると「よくいらつしゃいました」と大きな声が事務所に聞こえてきました。もう元気になられたのかな？と思いがらいると、1時間ほどの勉強会が終わり、また玄関で神父様の「来月もお待ちしています」との大きな声。皆を送り出し事務所に戻ってこられた神父様はへとへとで、「私はもう休みます」と勉強会の始まる前に休んでおられた部屋へ戻って行かれました。

そんなに無理をしてまで私達に伝えたかった、そして伝え続けておられた『主の御受難と復活の神秘』を四旬節に入り、改めて考えていきたいと思えます。

ウオード神父著

「十字架の使徒」を読んで

T.O.

ウオード・ビドル神父様が2月13日(水)に肺炎のために帰天されたのを知って、遂に御受難修道会日本準管区へ西欧から来られた宣教師に頼らずにわたしたちも自分の身に合った歩みを始める時が遅からずやって来るように感じた。

ウオード神父様は東京や福岡、宝塚の御受難会の修道院で接して多くの日本人を叙階に導

かれたというのをしばしば聞く。その恵みに与った御受難修道会の邦人神父のお一人でありながら、2016年7月に43歳の若さで天に召された松本一宏神父の葬儀ミサでワード神父様の説教が強く印象に残っている。ワード神父様は当時90歳を越す高齢にあつたにも拘わらず悲しさで曇ることない清々としたお声で、語尾が紛れることもなく、創造主である神様に全てを委ね、その計らいを信頼されて、救い主キリストに出会った松本一宏神父が召命に忠実に応え、自分の役割を果たされたと賛美されたのだ。

先日(2月19日)のワード神父様の通夜で福岡・宗像修道院から来られた来住英俊神父はワード神父様が人びととの出会いを喜び、外国人とは思えない流ちょうな日本語を用いて、周囲の日本人の何事にも控えめな振る舞いに躊躇することなく対面者に向き合つたと賛美された。

翌日の20日の葬儀ミサにおける御受難会日本準管区長の山内十束神父は過ちを改めるために受刑者となった人々を信頼し続けるワード神父様の愛の行為を例に挙げて、ワード神父様を御受難修道会の精髓を体現された方と賛美された。

通夜と葬儀ミサで語られたワード神父様のお姿はまるでエイリアンであつたので、2月下旬から早速、ワード神父様を師とする人びとが作られた兄弟会が神父様の叙階60周年を記念して編纂した「ワード神父様の講話集」を読み始めたが、自ら執筆した著作(「十字架の使徒—御受難会の聖パウロ」、あかし書房、1979年刊)があることを畠基幸神父から聞き、池田教会の図書棚に幸運にもその一冊を見つけた。この副題にある聖パウロはタルソス出身の使徒聖パウロとは別人で、フルネームをパウロ・フランシスコ・ダネオとしてイタリアの北部で1694年に生まれ、1727年に叙階された後、1775年に77歳で没し、十字架の聖パウロとして列聖された方だ。3年前に、「十字架の聖パウロの生涯」(ポール・フランシス・スペンサー著、丸山ヒデ子訳、ドン・ボスコ社、2007年刊)という伝記を読んでいたため、ワード神父様の著作「十字架の使徒—御受難会の聖パウロ」を読めばパウロ・ダネオその人と創立した御受難

修道会、さらに、修道会の現況についてワード神父様がどのようなお考えを持たれていたかを知ることができるかもしれないと期待した。

ワード神父様の著書の15章の内の12章が十字架の聖パウロの生涯、御受難修道会の設立の意図、設立までの長い道のり、創立した修道会の特徴、に費やされている。残りの3つの章にワード神父さまは御受難修道会の現状と役割を読者に信徒をも想定して書かれたようである。しかし、わたしにとっては紹介できるほど理解できた実感はなく、多くの方に本著書を読むように勧めたい。

17世紀末に誕生した幼少のパウロ・ダネオは母の祈りに満たされた平和な心を分かち与えられて育った。子どもたちが眠りにつくとき、母は聖人たちの話を語って聞かせることを習慣にしていたが、幼少のパウロはこれらの話を聞くのを喜んだという。御復活にとって苦しみ福音となるのは、キリストの磔刑像を片手にして母が櫛で子どもの髪をとかすときに櫛が髪の毛に引っかかると泣く子に母がキリストのいばらの冠を指さし、イエズスの頭がどれほど痛かったかを語り聞かせたことによってもたらされた。やがて、キリストの視点から物事をみるようになった青年パウロはイエスと同じように生きることを目標に持つようになった。彼の道にある障害物をむしろ助け手としてみる知恵を与えられていた。その障害物はキリストにより一層一致するための手段となった。

一方で、「生活を共にし、神のために働く仲間をあつめよ」という靈感が繰り返され、1721年にはその地区の司教の理解を得て、故郷の北イタリアの寒村にある教会の一室に籠り、書籍を一冊も持たずにイエスの御受難と死・復活を観想する共同体の会則を霊に促されて4日間で一気に書き上げたという。その会則案と司教の推薦書を手にして、素足で、単身訪ねたローマ教皇庁の門を叩くが、文字通りの門前払いを受ける。

しかし、北イタリアの故郷への帰途途上にある中央イタリアの西側の小さな岬のアルジェンタリオ山にある小さな庵でイエスの十字架の苦しみを観想して、「キリスト教の神は、完全な失敗と思われたイエスの死の中からイエスの勝利の栄光のうちに復活させた方なのであり、深い摂理の恩恵によって、人間の失敗が単に成功への踏み石に過ぎなくさせるように絶えず配慮してくださる」のを

疑うことはなかった。やがて、その地で長い年月を掛けて修道院と「聖マリアの奉献の教会」を献堂したり、ローマより南部の地区の司教からの招へいを受けて1727年に叙階した後は、イタリア半島の中央地域の各地で教会内に留まらずに、教会の外でも使徒的な活動を30年間も行った。人口密度の低い山岳地帯も巡り、出会う様々な人々に語りかけ、社会の様々な人々と分かち合う使徒的な活動—大きな十字架を掲げた行進、十字架の道行の演出、十字架の死・復活の神秘の観想法を工夫・普及、は多様な人々の悔悛に赦しを与え、回心に喜びを与えた。人々は3時間に及ぶ黙想会に参加し、司祭パウロ・ダネオの名を讃えた。そのように出会った人びとの中には山岳地帯に棲む盗賊を業とするグループもあり、少なくとも何人かはパウロの指導と十字架の使徒職によってすっかり生き方を変えるに至ったという。

修道会(御受難会)の会則が教皇と会見した時に口頭によって認められたのは1741年で、清貧、貞潔、従順の誓願に加えて、「人々の心にイエスの御受難の永続する正しい記憶を刻み付けるために全心を尽くす」という第四の誓が加えられている。しかし、正式の文書によって御受難修道会の会則が認可された1769年には、御受難修道会には多くの人材が集まり、修道女会も設立されていた。そして、創立者はその6年後に長い旅路を終えて、帰天した。

ここで、ウォード神父様が生涯で唯一の著書を著した事情をその著書の序に従って振り返ってみよう。それは、20世紀中葉に第2次世界大戦で初めての敗戦国となった日本の大阪司教田口神父の要請に応じて、米国のシカゴ管区御受難修道会から1954年の第1陣を皮切りに複数の神父から成るグループが来日したが、その1957年に来日した第2のグループの中に6年前に叙階したウォード神父様が居られた。爾来、ウォード神父様は日本における御受難修道会の宣教の中核を担って来た。日本語を習得し、信徒の集中練成会クルシリオ運動に関わり、黙想指導、司祭、神学生の指導と養成などを担って、1979年にウォード神父様はこの著書を公にした。

250年前に御受難修道会を多くの障壁があったにもかかわらず既に多くの修道会があった

イタリアの地に新たに御受難修道会を設立し、「十字架の使徒」となったこの聖人の包み隠すことのない伝記が日本における御受難修道会に加わった修道士や神学生、司祭にその修道会の役割と立ち向かう障害を明確に示すことになると考えたからであろう。また、日本の青年を自分たちの仲間になるよう奮い立たせてくれると期待しての出版であった。イタリアの歴史とは異なった歴史を辿って来た日本人との出会いがカトリックの普遍性を見直すことになったのである。

第6章-黙想の指導者 御受難修道会がイエス様の十字架の痛み・死をイエス様の復活の喜びへと変える十字架の神秘-過越しの神秘、を観想することと他者と分かち合う使徒活動(観想法と十字架の知恵の普及)のどちらにも偏らなかったのが御受難修道会だったというウォード神父様の指摘はイタリア地方でだけに限られたのではない。長時間の黙想会は疑いに信仰を、不安に平安を、誤解に信頼を、悔悛に赦しを齎すという信念は揺らぐことはなかった。

第7章-今日の御受難会 二つの世界大戦後には、管理下の無感動な労働が人々に被差別感や疎外感を与え、便利さの追求と商業主義が民族や地域の歴史的な文化を均質化して人々のアイデンティティを喪失させていた。第二バチカン公会議(1962~1965)が強調したように20世紀における生活・労働におけるストレスと緊張感は既に苦行であり、断食や不眠を強く勧めておらず、社会から除外されている人々や差別待遇に苦しんでいる人々に奉仕することや世界の多様な宗教や深層心理などに顕れる人々の多様性を互いに分かち合うためには自覚できない自己や異なる他者の存在を否定してはいけないのだろう。こうして、御受難会は改訂会則として次のような70条を加えたのではないかと思われる。「会員は過越しの神秘を自分の生涯の中心に置かねばならない。キリストの受難と死を愛をこめて研究し、信仰と愛の精神でそれを告げ知らせることができるよう準備しなければならない。この神秘は更に歴史的な出来事としてだけでなく、全人類の生涯の中で今もなお続いている神秘として扱うべきである。…一部省略…また信者の自己理解を深め、同時にグループであれ個人であれ、周りの人々の必要事に対してより豊かな感受性を持つように導くことである。」ウォード神父様は「人間

の失敗がキリストに於いて神の成功になるということ、また人間の苦しみはイエズスの苦しみの中にいまだかつて考えられなかったほどの価値と力があるということを我々の世界に語る必要が大いにある」と記し、ご自身の使徒的活動の入り口において、愛や同意を示せる方法として日本語による会話に熟達するのに励み、「出会い」や「対話」に特別な意味を込められていたと思われる

8章-宣教者のこころ イエズスもパウロ・ダネオも御父からの聖霊の導きに心を広く開けておられたので税理士や“罪人”と呼ばれていた人々の心の善さを感知できたから、民族や文化、その人の人格、家族や生まれ、神学的思考やその違いによって差別しなかった。ウォード神父様は「宣教師であろうが、信者であろうが、自らは神の愛を自覚していない人々に働いている神の愛の”し

るし”を見分ける力を聖霊の賜物(聖霊に対する機敏な感受性である宣教の精神)として戴いている筈だと書いている。

14章・十字架の知恵 最後に、「十字架の使徒―御受難会の聖パウロ」に書かれた御受難会の聖パウロの霊性についての深い洞察力を与えてくれる3通の手紙の中から一つの文を紹介する。

「祈りに取り掛かる時にはいつもイエズスの苦しみを選び、身に着けておいでなさい。…一部略…主の受けられた枷、鎖、打撲、むち打ち、傷、いばらの冠、十字架、それに死を己が身に引き受けることによって、わたしは、イエズスの常住しておられる御父のみ胸にイエズスと共に飛んでいき、神の内に浸りきるのです。…一部略…。どうかこれを試してみてください。あなたにとってこの方法が有益であることを願っております。」

短歌

水滴がそらに生まれて重力に
引かるる旅のすえのてのひら
傘を差すひとを映せる

古池の底に鯉らは雨をしのぐか

パウロ



俳句

春の星詫びたき人はみな去りて

ひな祭り座敷わらしも見え隠れ

マリア・クリステイナ



4月のガラスケースのことば

父よ、彼らをおゆるし下さい。

彼らは自分が何をしているのか分からないのです

ルカ 23・34

6名の洗礼志願者が宣誓

四旬節第一主日(3/10)のミサで、昨年6月から「信仰入門」講座を受講していた中から男女3名ずつ計6名の洗礼志願者が復活祭に入信の秘跡(洗礼、堅信、聖体)を受ける望みを証しました。「信仰入門」を始められた國井健宏神父と途中から受け継いだノイ・プラザ神父、そして代父母らの支えによって6名の洗礼志願が満たされるようにと信徒一同から激励の拍手が起こりました。



志願式を司式されるのは右からノイ神父と稲葉助祭、対面する列には6名の洗礼志願者とその直ぐ後ろには代父母が並んでいます。

表紙の写真について

2011年3月に日生中央教会で開かれた叙階60周年記念会におけるウォード・ビドル神父さま。

年間カレンダーに追加された 行事予定(5月4日まで)

- 3月31日(日) 福音宣教委員会
- 4月5、12、19日(金) 朝ミサ後
十字架の道行き
- 4月7、14、21、28日(日) 13:00~14:30
信仰入門
- 4月11、25日(木) 10:30~
聖書百週間
- 4月12日(金) 14:00~17:00 福音書を学ぶ会
映画「偉大な生涯の物語」(DVD)の鑑賞
- 4月20日(土) 19:00~ 復活徹夜祭
- 4月26日(金) 14:00~16:00 福音書を学ぶ会

宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

■ 日帰り黙想会

4月25日(木) 10:00~15:30

指導:山内十束神父

4月26日(金) 10:00~15:30

指導:山内十束神父



■ 週末黙想会 4月はありません。

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎ 0797(84)3111

編集後記

池田教会を設立し、わたしたち信徒を導かれた受難修道会の5人の神父様がこの2年半の間に相次いで神様の下に帰られた。松本一宏神父、デニス・マクゴワン神父、國井健宏神父、ガブリエル・プレシュット神父、ウォード・ビドル神父の5人である。これらの神父様のこの世の生誕地は日本(近畿)、米国、日本(近畿)、フランス、米国と4か国に別れるがどなたも若年にして受洗し、成人して召命を受けた後は、母国を離れて米国やイタリア、ドイツなど滞在することもあったが任地の日本に来られた後は池田か宝塚、宗像にあって、使徒職を全うされた後は、天に迎え入れられた。

わたしたちにとってはいずれの方の耳で聞いたお声と眼で見た多くのお姿は鮮明に遺り続けるでしょうから、これからのわたしたちに訪れる出発や終着などの通過儀礼の時も、心からの悔悛や回心の時も、わたしたちを励ましたり、導いて下さるようにと祈ることでしよう。

インマヌエル